

2015年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	静岡県立御殿場特別支援学校	氏名	山口 貴史
-----	---------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私が現地での研修における目的は、担任する障害のある児童が自分自身や自分を取り巻く環境において、多様な見方をもつことができるようになるために、①私自身が現地の人々や文化、暮らしを受容して1つの教材となること、②現地の人々が用いる実物を収集することの2つであった。①については、私自身の現地での経験や体験で達成することができた。ガーナという国に行くことで、ガーナの人々の温かさ、人間性、文化、暮らしに直接向き合い、多様な見方をもつ視点をもらった。それと同時に、人々はつながっており、互いに協力し合って生きていることも感じることもできた。そのため、自分自身が教材となり、日本の児童だけではなく、教員や保護者、地域の人々など、できる限り多くの人に伝えることを実践していきたい。また、②については、現地の民族衣装や楽器、保存用として食材が加工された粉、油などを収集することで達成した。これらは、現地に行かないと手に入れないものが多い。授業で、実際に着る、触れる、食すことを通して、少しでもガーナを身近に感じ、自分たちの取り巻く生活との違いに気づく視点をもてるようにしていきたい。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

今回の研修で大切だと思ったことは、自分の先入観に頼りすぎず、現地のことを身近に感じ、“もっと知りたい”という気持ちを持つことである。事前に調べていたことがあったが、現地に行く前のイメージと、現地に行き、見て、聞いて、感じたこととの差が個人的には大きかったように思う。しかし、研修が進むにつれて、事前に調べていたことと、現地での実際に経験したことを合わせていく中で、ガーナに対する自分なりのイメージを持つことができた。ガーナの車や自転車事情、住居、食生活、農業経営など、様々な場面でその人たちが抱える問題や課題に直面しながらも、みんなで協力し合っていることを感じた。“人々はどこでどんな生活をしていても笑顔で生きている”ということを感じさせる経験は私自身のとても大きな感動であった。情報化社会が進む現代において、情報は無数にあり、いくらでも手に入る。しかし、その情報を、現地に行き、ガーナの根本や背景、人間性などと合わせながら、しっかりと捉えて考えていくことで、ガーナをより身近に感じ、肯定的で多面的な視点で見ることができるようになっていくと感じた。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

今回の研修では、様々な研修先を見学した。その中で、野口研究所、伊藤忠商事、農園など様々なところで日本とガーナがつながっていると感じた。ガーナという国に多くの日本人が関わっていることは、自分自身はあまり知らなかったが、とても嬉しく感じたことであった。ここで関わっていた人々は、自国の利益を高めようとするだけでなく、互いの国を尊重しながら、互いの国のためになるように活動していた。この結果、自分だけがよいという視点ではなく、すべての人のためになるように考え、工夫して、行動しようとする気持ちを生み出していると感じた。それは、どの国においても大切なことである。特に、これからの未来を背負っていく子どもたちにとっては、尚更であろう。ガーナに関わった子どもたちは、みんな素敵な笑顔で、いきいき

と活動していた。これは、どの国のどんな子どもも同様であってほしいことである。笑顔で、いきいきと活動する中で、自分の夢や志をしっかりと持ち、共に生きている人々のことを考えながら行動できるように、大きく成長していったと強く感じた。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

今回の研修先の中で、「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点において、野口研究所と学校現場での活動が、特に印象に残っている。野口研究所では、日本人とガーナ人の研究者たちがパートナーシップの関係で協力し合って研究を進めていた。日本のもつ技術や必要器材、ガーナのもつ豊富な資源を合わせながら、互いの国のために共に高め合う姿は、素晴らしいものであった。特に、若い研究者達から強い意志を感じることができ、これからの社会がよりよくなっていくことを期待させる出来事であった。学校現場では、青年海外協力隊が現地のもので、現地の人ができる支援を行っていた。この支援は単に与えるものではなく、共に考えて作り上げるものであった。教材がないから教えることが難しいという課題に、現地のもので現地の人ができることを、現地の人々と一緒に考え、共に乗り越えていこうとする姿がとても印象的であった。これによって、多様な視点で物事をみることができるようになり、他の課題に直面した場合でも解決することができる視点を持ちやすくなり、今後のよりよい生活の糧になっていくと感じた。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「良い!と思ったところ」は、現地の要望の応じた支援や人員派遣を行っていることである。支援をする、人員派遣をするといっても、その地域の人々や地域柄が必ず基本となる。現地の人々が自分たちの力で、自分たちができる方法で取り組み、よりよい生活にしていけるようにすることを目指している。そのため、段階的な支援を行い、最後は支援がなくなっても現地の人々が自分たちの力で取り組んでいけるように、支援のタイミングや量を考えて事業を行っていると感じた。しかし、取り組みが一時的で終わってしまっても意味がない。継続して取り組んでいけることが大切である。そのため、取り組みができた段階で支援を終わるのではなく、定期的に継続して取り組みの様子を伺ったり、さらに発展した取り組みの模索をしたりなど、見守り発展させるといった視点の支援も大切にしていける必要があると感じた。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

※別掲

5. 印象に残る写真2点とその解説

●写真1… [DOK_9427]

◇キャプション：笑顔で遊ぶ子どもたち/現地の学校に関わる青年海外協力隊の想い

◇解説文：青年海外協力隊と児童が元気いっぱい遊ぶ姿を現した写真である。子どもたちの笑顔を少しでも引き出そうと、夢に少しでも近づけるようにと、子どもたちと同じ気持ちになって活動する姿がとても印象的であった。



●写真2… [AOS_0714]

◇キャプション：よりよいパートナーシップ／協力して高め合う日本とガーナの研究者たち

◇解説文：器材や資金援助だけではなく、研究者同士が技術や知識を高め合いながら、互いの国のために協力して働く姿を写した写真である。特に、若い研修者の意欲が高く、率先して留学や語学勉強などする姿勢がとても印象的であった。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・蚊（マラリア）対策は、虫よけスプレー、室内用の蚊よけがあれば十分であると感じた。
- ・持ち物は、移動中のバスで食べるお菓子があると、一緒にバスに乗った青年海外協力隊さんにとっても喜ばれる。
- ・必要な準備としては、やはり英語力。今回は、英語が得意な参加者が少ないこともあり、できる人の負担が大きかった。自分が聞きたいことは英語で話せるようにしておくのとよかった。また、現地語もあいさつ程度でもできると喜ばれる。
- ・学びの視点としては、先入観を持ちすぎないこと。現地で感じることはたくさんある。事前に調べたことと現地で感じたことを合わせながら、自分のものに吸収していくときはとても楽しかった。また、これだけは絶対知りたい！という視点を1つもって行くことも大切である。自分は特別支援の状況を知りたかったので、全体の質問時間だけではなく、移動中や休憩中にも個別に質問することもあった。質問が明確であった分、短時間に多くの情報を聞くことができたので、とてもよかった。

7. その他全般を通じての感想・意見など

この研修に参加してよかった！と心から思った。特に、現地の学校の様子だけではなく、カカオ農園やパイナップル農園などの実態や青年海外協力隊の活動の様子、伊藤忠商事の話やチョコレート工場の見学などから、ガーナの生活や経済などを様々な視点から捉えることができたことが大きい。学校現場にいるだけでは気づいたり感じたりすることができないことも、今回の研修を通してその重要性を再確認し、今後の自分の考え方も大きな影響を与えた。また、一人ではなく仲間とともに研修を行ったことで、考えたことを共有し、深めることができた。一人では思いつかなかったり専門外のことであったりしても、仲間が集まれば解決することが多かった。また、自分の意見を広げて深めたり、新しい視点を与えたりしてくれることも多かった。一人での研修よりも何倍も何十倍の実りのある研修になったと感じる。今後は、学んできたことの授業実践において、どの校種に、どんな指導を行ったのかを共有しながら、教員としての実践の幅や考え方も広げたり深めたりしていきたい。

以上